



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(2017.12) 平成29年度:33-34.

看護学生の性格が精神疾患患者へのコミュニケーションに及ぼす影響

小林 唯花, 古村 真悠, 柳瀬 莉奈

看護学生の性格が精神疾患患者への コミュニケーションに及ぼす影響

小林 唯花 古村 真悠 柳瀬 莉奈
(指導：平 義樹)

緒言

看護実習において私たち看護学生は様々な疾患を抱える患者と接し、コミュニケーションを図る必要がある。その中で精神疾患の患者に対しては経験不足および心理的なバイアスから「怖い」、「関わり方が難しい」等の感情が想起され、コミュニケーションを図ることに困難を感じる学生が多くみられる。しかし一方で、困難を感じず、積極的にコミュニケーションを図れる学生も存在する。両者の違いは、個々の学生の性格特性や行動特性が大きく関係していると考えられるが、この観点からの研究はあまりなされていない。

方法

研究対象：

旭川市内のA大学看護学科2～4年生(A2～A4)、B専門学校看護学科3年生(B3)

調査方法：

質問紙調査法とし、無記名自記式質問紙を用いて集合法で配布し、回収する。回収の際には回収ボックスを教室後方に設置する。

調査内容：

以下の尺度を用いて、性格とコミュニケーションの関連要因を調査する。また、精神疾患患者に対してどのような想いを持っているか自由記述してもらう。

1. 援助規範意識

返済規範/自己犠牲規範/交換規範/弱者救済規範の4因子、計29項目。「非常に反対する」～「非常に賛成する」の5件法で尋ねる。

2. Big Five

外向性/情緒不安定性/開放性/誠実性/調和性の5因子、計60項目。「まったくあてはまらない」～「非常にあてはまる」の7件法で尋ねる。

データ分析方法：

本研究の目的を達成するために、下記の3つの仮説を立て、分析を行う。

仮説1：誠実性の高い群（高誠実群）は、高い返済規範意識と弱者救済意識を示し、精神疾患患者の個別性に重点を置いたコミュニケーションをとる。

仮説2：外向性の高い群（高外向群）は、高い自己犠牲規範意識を示し、精神疾患患者の負のイメージに感わされず、他疾患患者と同様なコミュニケーションをとる。

仮説3：情緒不安定性の高い群（高情緒不安定群）は、返済規範意識が高く、精神疾患患者とのコミュニケーションにおいて、不安感や恐怖感を持ちやすい。

誠実性、外向性および情緒不安定性は、Big Five尺度のアンケート結果に基づいて得点化し、全体の平均点より高群と低群に2分する。

これら2群間について、精神疾患患者に対する各援助規範意識の因子を比較する。開放性と調和性に関しては仮説検証には使用しないが、他の性格特性と同様な解析を行い、本研究の対象となる看護学生についての基礎データとして用いる。さらに、自由記述で得られた精神疾患患者への認識に関する言語的データを分析するにあたり、記述内容のコーディング・カテゴリー化を行う。2群間で比較することで、性格特性ごとの精神疾患患者に対するコミュニケーション特性について抽出する。尚、援助規範意識の比較にはt検定(有意水準5%)を用いる。

倫理的配慮：

1. 調査の協力は自由意思であり、協力の有無に関わらず、研究対象者が不利益を被ることは一切ないことを約束する。
2. 本研究で集計した質問紙・データは個人の特定ができないよう無記名の質問紙を使い回答から得られた情報は本研究にのみ使用する。また研究終了後は速やかに細断処理し破棄することを約束する。尚、この研究結果は本学の卒業研究発表会で発表する。
3. 研究対象者の自由意思に基づいて質問紙に回答し、提出されたことで、本研究の最終的な同意とする。

結果

本調査における調査票の回収率および結果は以下の表1～5のとおりである。

A大学では、A2は高情緒不安定群の割合が、A3は高外向群が高い傾向を示した。A4は高誠実、高外向および高情緒不安定の各群の割合は同程度であった。またB3は、高情緒不安定群が高い傾向を示した。これらの各群で、A4の高情緒不安群のみ返済規範に有意差を認めた。またコーディングより、A2およびA3は「わからない」「不安」等の否定的な結果が大勢を占めたが、A4では「個性が大切」等の肯定的なイメージも見られた。一方、B3では否定的なイメージはほとんど見られず、肯定的なイメージのみであった。

表1. 質問紙回収率と自由記述回答率

	質問紙回収率	自由記述回答率
A2	55.9% (33人/55人)	39.4% (13人/33人)
A3	28.6% (18人/63人)	19.0% (12人/63人)
A4	98.0% (50人/51人)	74.5% (38人/51人)
B3	100.0% (28人/28人)	60.7% (17人/28人)

表2. コーディング結果

	A2(13人)	A3(12人)	A4(38人)	B3(17人)
わからない・難しい	6人	4人	16人	0人
不安・怖い	4人	8人	1人	0人
関わりたくない	0人	1人	0人	0人
かわいそう	0人	0人	2人	0人
甘えがある	1人	0人	0人	0人
普通と変わらない	1人	0人	1人	5人
力になりたい	1人	0人	1人	1人
個性が大切	0人	0人	14人	5人
ネガティブイメージが減った	0人	0人	5人	2人
優しい	0人	0人	0人	4人
楽しい	0人	0人	1人	0人

表3. 誠実群

	返済	弱者救済	自己犠牲
A2 (31%)	t(31)=0.01 p=.992 有意差なし	t(31)=0.464 p=.646 有意差なし	t(31)=0.422 p=.511 有意差なし
A3 (42%)	t(16)=1.52 p=.148 有意差なし	t(16)=0.747 p=.466 有意差なし	t(16)=0.119 p=.700 有意差なし
A4 (42%)	t(48)=0.800 p=.428 有意差なし	t(48)=1.721 p=.092 有意差なし	t(48)=0.145 p=.314 有意差なし
B3 (59%)	t(26)=0.262 p=.796 有意差なし	t(26)=0.401 p=.692 有意差なし	t(26)=1.847 p=.883 有意差なし

表4. 外向群

	返済	弱者救済	自己犠牲
A2 (46%)	t(31)=0.01 p=.255 有意差なし	t(31)=1.269 p=.215 有意差なし	t(31)=0.081 p=.991 有意差なし
A3 (58%)	t(16)=1.127 p=.700 有意差なし	t(16)=1.443 p=.212 有意差なし	t(16)=0.299 p=.771 有意差なし
A4 (45%)	t(48)=0.792 p=.453 有意差なし	t(48)=0.066 p=.901 有意差なし	t(48)=1.958 p=.0587 有意差なし
B3 (35%)	t(26)=0.758 p=.837 有意差なし	t(26)=0.960 p=.373 有意差なし	t(26)=0.719 p=.386 有意差なし

表5. 情緒不安群

	返済	弱者救済	自己犠牲
A2 (77%)	t(31)=1.285 p=.208 有意差なし	t(31)=1.198 p=.130 有意差なし	t(31)=0.75 p=.332 有意差なし
A3 (50%)	t(16)=0.721 p=.481 有意差なし	t(16)=1.138 p=.678 有意差なし	t(16)=0.571 p=.246 有意差なし
A4 (47%)	t(48)=2.187 p=.034 有意差あり	t(48)=0.460 p=.265 有意差なし	t(48)=0.667 p=.133 有意差なし
B3 (71%)	t(26)=0.309 p=.760 有意差なし	t(26)=1.315 p=.566 有意差なし	t(26)=0.404 p=.523 有意差なし

表3～表5: Big Fiveのうち誠実群/外向群/情緒不安群での教育機関および学年別援助規範意識の検定結果。%は各群の学年ごとの割合を示す。重複するため総数は100%を超える。

考察

上記結果より、まずA2では高情緒不安定群が多いため、精神疾患患者に対するコミュニケーションに不安・恐怖を感じる傾向が高くなると考えられ、さらに精神看護学の講義が未履修であることがこれを助長していると考えられる。A3が高外向群を示すのは、精神疾患に対する知識を得、精神看護に対する意欲の表れと思われるが、領域実習前である点で不安・恐怖がコーディング結果として現れていると考える。A4の結果は、A2およびA3での不安要素が講義・実習を通して改善されたためと考えられる。ただし高情緒不安定群の中には、A4においても不安・恐怖を抱く者も存在し、教育効果が個人の性格傾向により阻害されていると考えられる。これらは先行研究での中島ら³⁾の主張である「精神疾患患者のイメージの改善には実習が非常に有効であること」、また太田ら⁴⁾が主張する「学生は実習を通して抽象的な否定的イメージが軽減すること」と一致し、否定的な

イメージは教育によって完全には無くならないが実習を経験することで否定的イメージが軽減し、肯定的イメージを抱く者が増加すると考えられる。B3は教育状況においてはA4とほぼ同様であるが、A4に比べ、情緒不安定群が高い傾向が見られること、コーディングで否定的イメージがほとんどない点が異なる。これらの差は、それぞれのコミュニティや教育過程の差異によると示唆されるが、現段階の研究結果からは明らかにはされなかった。

これらの結果と考察から仮説1～3については下記のようにまとめられる。

1) 仮説1および仮説2

高誠実群では、援助規範尺度を見た場合、必ずしも高い返済規範意識と弱者救済意識を呈さない。また、高外向群においても高い自己犠牲規範意識を示すものではなかった。しかし、コーディングの結果から、両群ともにA2からA4へと学年が進むに従い、精神疾患患者の個別性に重点を置いたコミュニケーションスキルや精神疾患患者への負のイメージに惑わされずにコミュニケーションをとるスキルが身についてくると考えられる。

2) 仮説3

高情緒不安定群の者は、精神疾患や精神疾患患者とのコミュニケーションに不安や恐怖心、困難感を強く抱く傾向にある。また、高情緒不安定群の者は、A4では高い返済規範意識を呈しており、仮説はある程度証明された。しかし、実習後のA4、B3はポジティブイメージを抱く者も現れている。よって、既に精神疾患についての講義・実習を履修済みであることを考慮すると、情緒の不安定性をいかに克服するかが教育効果を高めるためには必要であると考えられる。

3) 今後の課題

今回使用した尺度はBig Five(60項目)、援助規範意識尺度(29項目)と項目数が多く、かつ理解しづらい項目が存在した。そのため、今回の調査に必要な質問項目だけに絞って質問紙を作成すると、被験者の負担が軽減し、異なる結果が出た可能性がある。また、上記で述べたように対象学生の教育課程や実習施設、実習内容、受け持ち患者の情報などについての追加調査を行うことで、より研究目的が達成され则认为る。

謝辞

本研究にあたり、調査に御理解・御協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 河村一海, 土屋尚義, 金井和子 他:看護学生の行動特性と性格特性の関連について, 金大医短紀要, 17, 181-186, 1993
- 2) 田丸早苗, 山本朋子:精神看護学実習における看護学生の戸惑い, 第41回日本看護学会論文集 精神看護, 41, 151-154, 2010
- 3) 中島充代, 梅津郁美:看護学生の精神障がい者に対するイメージと社会的距離の変化-精神科経験と講義・実習の影響-, 大阪信愛女学院短期大学紀要, 44, 13-18, 2010
- 4) 太田友子, 廣瀬春次, 水津達郎 他:精神看護学実習前後における看護大学生が精神科看護に対して抱く思いに関する分析, 山口県立大学学術情報, 5, 1-10